



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



「SDGs」とは2015年9月の国連サミットで採択された、2030年までに達成を目指す「持続可能な開発目標」です。17のゴールから構成され、地球上の「誰一人取り残さない (Leave no one behind)」という理念を掲げています。

持続可能な社会と人々のウェルビーイングを目指して

静岡大学は、持続可能な社会の実現に向けて、複雑な社会的課題に多面的・戦略的にアプローチし、SDGsの17の達成目標のすべてに組織的・統一的な取組を進めています。今号では本学が取り組む研究活動の事例を紹介します。



絵本「どうぶつといっしょにちきゅうのみらいをかんがえよう〜もりはかんたんにはかいふくしないんだ〜」より

全国フォーラムでESDを軸とした質の高い幼児教育を推進

～日本平動物園とのコラボで「SDGsデジタル絵本」を作成～

教育学部 田宮 緑 教授

持続可能な開発のための教育「ESD: Education for Sustainable Development」を基軸とした質の高い幼児教育の推進と学校種間の接続をテーマに、「全国幼児教育ESDフォーラム2020」を開催しました。加えて、他団体との連携し、ESD実践研修会(テーマ:持続可能な社会の創り手を育む生活・総合)も全国規模で実施し、SDGs達成の中核的な担い手となる教師の教育を推進しています。具体的な取り組みとして、SDGsを幼児や小学校低学年の子どもたちにも理解しやすいように、静岡市立日本平動物園で人気のオランウータンを主人公とするSDGsデジタル絵本(電子書籍)を作成して動物園HPより公開しています。子どもたちの興味関心を高める取り組みとして、メディアでも紹介されました。



駿河湾のサクラエビ不漁問題解決に向けた生態系と海洋環境の科学的調査

創造科学技術大学院 ベアトリス・カサレト 特任教授
サステナビリティセンター 鈴木利幸 特任助教

近年、地球温暖化による海水温の上昇、河川流量と土砂流出の増加により、海洋環境が急速に変化しています。2018年からサクラエビの漁獲量は急激に減少し、春漁・秋漁は縮小・中止に追い込まれ、漁業者・関連業者に打撃を与えています。県・市・漁協と協力しながら科学的な調査を実施し、不漁の原因の解明と技術開発等の解決策を示します。駿河湾のプランクトンと化学成分の季節変化、サクラエビの資源量推定のための動態の調査、卵から稚エビまでの孵化実験を行い成長過程における餌の種類とサイズを確定しました。



国内のサクラエビの水揚げは駿河湾のみ



吉川真理教授(左)と朱嘩教授(右)

スマート・シティにおけるAIの実用化を見据えて法的基盤などを構築

サステナビリティセンター 法実務部門 朱 嘩 教授
サステナビリティセンター 法実務部門 吉川真理 教授

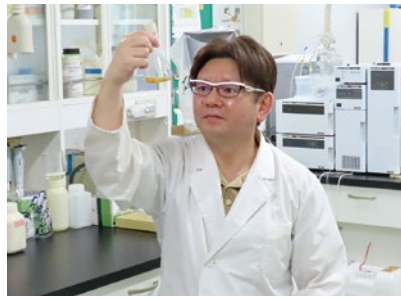
AIなど先端技術の利活用に関わる課題を法学、倫理学、社会学、情報工学など学際的なアプローチにより考察します。さらに、AIなど先端技術の利活用によるスマート・シティ構築をめざす裾野市に対して、必要とされる情報・データの取り扱い、住民との合意形成、住民主体のまちづくりに向けて自治体が果たす役割や課題について、「法」や「AI」など専門的な分野から助言を行うことにより、地域課題への実践的貢献を目指します。



低炭素循環型社会構築に向けた未利用バイオマスからのバイオ燃料およびプラスチック原料生産技術開発

農学部 平井浩文 教授

人口が急激に増加し、地球温暖化が深刻化する中、再生可能資源であるバイオマスを原料に、バイオ燃料や樹脂などを製造する「バイオリファイナリー技術」の確立は、重要な課題です。これまでに、木材中のリグニンという物質を分解する能力をもつ白色腐朽菌を用いたワンステップ木質バイオリファイナリーに関する研究を展開し、木材中のセルロースからエタノール、乳酸、酢酸、キシリトール、水素を産生できることを報告しました。低炭素循環型社会の構築とゼロエミッションの達成に向けて、白色腐朽菌によるリグニンからの物質生産技術の確立に取り組みます。



バイオマスの状態を確認する平井浩文教授